
事件簿その3 名探偵は手毬歌で推理する

相川蛭太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

事件簿その3 名探偵は手毬歌で推理する

【Nコード】

N1907S

【作者名】

相川蛍太

【あらすじ】

解決編だけの超短編ミステリー小説その3です。旧家の一族に迫る伝説の殺人鬼の正体とは！？

名探偵御影石明の事件簿

事件簿その3 名探偵は手毬歌で推理する

偉い坊さん仏に祈る

そこへ獵師が鉄砲持つて

座禅のままの坊さん撃った

海老と亀がそれ見て笑う

いつものように麻宮崎の断崖には彼女の歌う手鞠歌が陰鬱に響いていた、何度聞いても不気味な歌だ。

私と御影石は鬼六家三姉妹最後の一人となったのぞみを追ってこの断崖へやってきたのだ。彼女は断崖の突端に奉られた小さな祠の方を向いて歌っていた。そこには三年前に死んだ彼女の娘、うらがが弔われている。

「のぞみさん、貴女が荒縄夜叉だったのですね」

御影石が静かに言った。彼のトレンチコートの裾が突風にはためく。

「あら、どうしてそう思われるのかしら？」

彼女は少しだけ微笑んだ。その笑顔は美しくも悲しい。御影石が真相を看破している事を知っていながらあえて挑む眼だ。

「良いでしょう。貴女が望まれるのであれば、私がこの悲劇の、鬼六家殺人事件の語り部となりましょう」

そう答える名探偵の瞳もまた悲しみを湛えていた。

「事件は3年前のうららちゃんの誘拐、死亡事件から始まりました

「御影石が静かに語り始めた。のぞみの娘であるうらがが誘拐され、後ろ手に縛られた溺死体として正三沼から発見されたのが3年前、途中で身代金の受け取りを諦めた犯人が顔を見られたうらがちゃんを処分したというのが警察の見解だった。その犯人は未だ見つかっていない。この過去の事件もまた、今回の連続殺人事件の一部だったと御影石は言うのだろうか。」

「違う！ あれは誘拐事件なんじゃない！」

御影石の言葉にのぞみは始めて激しい感情を見せた。

「そう、あの事件の真相は鬼六家の家徳争いが生んだ偽装誘拐だった。うらがちゃんは最初から殺されるために攫われていた。のぞみさんの姉たちによってね」

「なんだって！？ それは本当なのか」

今まで傍観者であつた私も思わず口を挟んでしまった。あの誘拐事件の犯人は鬼六家の人間だったというのか。

「そう、男子に恵まれなかった先代のなぎさ翁は三人の女子のうち最初に子供をもつけた者に家徳を譲るとされた」

絶望的と思われていたなぎさ翁の容態は4年前の大手術に成功し、ここ数年安定していたのだが、ここ数ヶ月急激に悪化している。医師からも回復は絶望的だと宣告されているそうだ。

「そして、都会に出ていた三女であるのぞみさんが最初に結婚し、うらがちゃんを身ごもった」

「当時、私と夏さんは本当に愛し合っていました。本当は家徳なんてどうでも良かった。でも母や姉たちは、この村を捨てた私が家を継ぐことを許せなかった」

夏氏は二年前に事故死したのぞみの夫だ。のぞみの職場で知り合い、結婚して鬼六グループで働く以前、彼は東京でサラリーマンをしていたらしい。

「だからって、うらがちゃんを じゃあ、今回の連続殺人事件は 」

「そう、復讐だったのさ。のぞみさんの鬼六家へ対する」

「姉たちは最後まで私がうらの殺害を単なる誘拐事件と信じていると思っていたわ。田舎者の姉たちは実在するはずもない荒縄夜叉の姿に怯え続けたのよ」

彼女はそう言い捨てて凄惨に笑った。だがそれは違う、荒縄夜叉は確かに存在したのだ。彼女の心の中に

御稻荷山に住み、村に下りては女を荒縄で縛り、責め苛んで殺すと伝えられる伝説の鬼、荒縄夜叉・蛇縛。この平成の世の中でわかには信じられない話だが、確かに、蛇縛村の村人たちは真剣に荒縄夜叉の存在を恐れていた。

「だから、あんなに惨たらしく」

自分の家族を縛り上げて手にかけてたというのか

「それは違うよ壇ノ浦君。あれは見立てだったのさ」

「見立て？」

私だってミステリー作家のはしくれた。無論、言葉の意味を聞いたわけではない。見立てとはミステリー小説におけるパターンの一つで、殺人の状況が何かに見立てて演出されていることを指す。ヨハネ黙示録やタロットカードや和歌に見立てた殺人が出てくる小説は掃いて捨てるほど存在する。しかも大抵は読者が納得するほど大した意味は無い。アレとか、アレとか、なんなんだよもう。

だが、今回の殺人は一体なんに見立てられていたのだ？ 私は遺体の状況を思い出す

長女のかまちは右手を上から、左手を下から背中にし、縛られて撲殺されていた。

母のかれんさんは胡坐のように座った状態で縛られて刺殺されていた。

次女のりんさんはかれんさんの時と似ていて、座禅のように縛られていたが、さらに身体を二つに折り曲げるように縛られて溺死させられていた。

だが、これは一体なんの見立てなのだろうか？　しばらく考えたが私には判らない。犯行を重ねるたび、だんだんと縛り方が執拗になってきている気はするが。

「まだ分らないのかい？　江戸時代には身分ごとに戒められ方が違ったともいうほどだ。緊縛というのは文化なのだよ。つまり、遺体の縛り方にはそれぞれ名前があったのさ」

御影石の得意げな笑顔に私は嫌な予感を感じた。

「今回の殺人では順に、鉄砲縛り、座禅縛り、海老責め　そして少し強引だがうららちゃんが後ろ手に縛られていたのを合掌縛りと解釈すれば、いくら君でも分かっただろう？」

「あつ、手毬歌　」

なんとということだ、方法はともかく、遺体は三年前のうららの死から順に手毬歌になぞらえてあったのだ。御影石村に古くから伝わる、うららが好きだったという手毬歌。うららの死から始まり一連の事件をその歌になぞらえたのは彼女なりの告発だったのだろうか？

「見立てに気付いて素直に自分の罪を認め、うららに詫びたなら、そいつだけは許してあげようと思っていたのだけれど、結局は誰も気付かなかったわ」

彼女はそう言って寂しげに祠を見た。誰がわかるかそんなマニアックな見立て。

「残された見立ては一つ。荒縄夜叉の最後の獲物はコージさんの予定だったのですね。多くの犠牲者は出したが、最後の一人だけは救う事ができました」

そう言う御影石の表情は悔しげだ。コージはのぞみの直後に結婚した次女のりんの夫だ。のぞみの結婚に焦って急遽決まった縁談だったらしいが、二人の間に子供はいない。夫婦の不仲が原因だと噂されているが

「まだ分らないわよ。まだ貴方に捕まったわけじゃないもののぞみは挑戦的に笑った。

「いいえ、貴女に彼を殺す事は絶対に不可能です」

しかし御影石は断言する。

「どうしてかしら？」

「なぜなら、最後の見立てである『亀』は既に成されているからです！」

そう言つて御影石はトレンチコートを脱いだ。すると、御影石の白ブリーフ一丁の裸体に見事な亀甲縛りが施されていた。やれやれ、またこのパターンか。ホントこういうの好きだなコイツ。

しかし、のぞみには驚いた様子は微塵も無かった。それどころか、彼女は笑った。

「ふふふ。貴方はとても優秀な探偵さんだけど、一つだけ大きな勘違いをしているわ。荒縄夜叉の最後の獲物はコージさんではないの」

「
そう言つて彼女もロングコートを脱いだ。牡丹の花のように、真紅のコートが崖から海へと舞い落ちる。しかし、私の目はそれよりも眼前ののぞみの姿に釘付けになっていた。彼女もまた、下着の上に亀甲縛りに荒縄が巻きついた姿だったのだ。御影石の奇行には慣れていた私もこれには開いた口が塞がらなかった。」

「
なんとということだ」

さすがの御影石も驚愕の表情を隠せない。向かい合う二人の変態だが、二人の表情は真剣だ。むしろこの場で普通に服を着ている私の方がおかしいような錯覚すら覚えるほどに。

「かれんは私とコージさんの子供だったの」

「
そんな」

「夏さんは村に来てから変わった。都会は人を変えらというけれど、田舎も人を変えるのよ。何の刺激もない退屈な村で、彼は酒とゲートボールに溺れ、腐っていったわ」

「
彼女は吐き捨てるように言った。」

「そんな中、優しくしてくれたのがコージさんだったの。きっと、彼なら新しい鬼六家を築いていつてくれるはず。だから、荒縄夜叉

の最後の餌食は私、これで鬼六家の呪われた血も途絶えるわ。かれんもそれを望んでいるはず」

そう言っただけは崖に向かって身を翻そうとした。が

「ふふ、ふふふふ……」

硬直していた御影石が突然笑い出した。

「なに、この哀れな復讐の鬼の最後を笑うというの」

のぞみが怒りを含んだ眼差しで振り返った。

「いいえ、やはりかれんちゃんは貴女の死なんか望んではいませんよ。ほら、ご自分の縄を良く御覧なさい」

御影石が優しく言った。のぞみは自分に施された荒縄を見る。

「これは……」

彼女は驚愕の表情を浮かべるが私には何の事だかわからない。つか今の状況が理解できない。

「そう、それは亀甲縛りに良く似ているが違う。菱絞縛りだ！」

そう言っただけで指差した。良く見ると、確かに御影石の縛り方では腹部に見事な正六角形が現れているが、彼女の縄目にはそれがなかった。ただの菱形だ。

「ああ…… かれん……」

彼女は嗚咽と共に崩れ落ちた。

「いくら荒縄夜叉とはいえ、他人に縄をかけるのは得意でも自分に掛ける場合はそうもいかなかったようですね。残念ながらこれでは見立ては完成しません。さあ」

そう言っただけで御影石はのぞみの手をとった。彼女の凍てついた心を溶かすように降り注ぐ陽光、切り立った崖の先にはどこまでも青い空と海が溶け合っている。そして、断崖絶壁に立つ二人の緊縛された男女。私はその奇跡のように切り取られたポートレートをアップル通信かＳＭスナイパーの投稿写真のようだと思った

「ねえ、貴方はいつから私の事を怪しいと思っていたの？」

屋敷へ帰る道、のぞみは御影石に聞いた。いいからお前らはまず

服を着る。

「貴女に、初めて会った時からですよ」

「えっ、それは本当かい？」

私は驚いた。長女のコまちさんの殺人事件の依頼を次女のりんさんから受け、この蛇縛村にやってきて最初に会ったのがのぞみさんだったのだ。その時点ではこまちさんの殺害について以外ほとんどなんの情報も無かったというのに

「私、何かおかしい事を口にしたかしら？」

彼女もなんの心当たりもないようだ。不思議そうにたずねる。

「そうではありませんよ。ほら、この姿に見覚えはありませんか？」

御影石はそう言ってブリーフと荒縄だけの姿で両手を広げてみせた。やめろ。

「もしかして、ポチなの？」

のぞみが驚いた表情で言う、御影石の顔が輝いた。ポチ？

「思い出せないのも仕方ありません。女王様の前では服を着ることも、人間の言葉を喋ることも許されない一介の飼い犬でしたから。」

でも、私には一目見た瞬間にわかりましたよ」

20年以上の付き合いになるが、御影石のこんなに嬉しそうな表情を見たのは初めてのことだったかもしれない。

後から聞いた話なのだが、のぞみは昔、御影石が通いつめていた歌舞伎町のSMクラブ「光の園」で人気No.1の女王様だったらしい。つうか、この女は上京してそんなことをやっていたのか。

まさか、彼女と夏氏との出会いと言うのも いや、余計な詮索はよそう。

「まさか、あのポチが探偵だったなんて 飼い犬に手を噛まれるとはまさにこのことね」

彼女は涙に濡れた目で、少しだけ笑った。うまいこと言ってる場合か。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1907s/>

事件簿その3 名探偵は手毬歌で推理する

2011年4月3日22時40分発行